

# 大志白遺跡群発掘調査概報 I

—アンビックス緑が丘ニュータウン開発事業に伴う平成8年度発掘調査概報—



1997

河内町教育委員会

## 序 文

大志白遺跡群の発掘調査は、平成4年2月に日本国土開発株式会社からアンビックス緑が丘ニュータウン開発事業計画書が提出されたことに起因し、試掘調査を経て平成8年10月から本調査が開始されました。

このたびの発掘調査は、河内町がいままで経験したことがない大規模な調査であり、実施に至るまでにたくさんの方々のご指導・ご助言等をいただいております。

栃木県のほぼ中央に位置する河内町の西部丘陵地帯には、いくつかの遺跡の包蔵地が確認されていますが、数百年前までしかわかっていない河内町の歴史が、この発掘調査によって数千年、数万年前の祖先の生活や他の地域とのつながりが明らかになるのではないかと大きな期待と関心を寄せています。

最後に、この発掘調査の目的をよくご理解賜わり、ご援助下さった日本国土開発株式会社関係者の方々に衷心より感謝の意を表すると同時に、ご指導をいただいた文化庁、栃木県教育委員会をはじめ関係各位のご協力に対して厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月

河内町宅地造成事業遺跡調査団  
団長 和田 實

## 例 言

1. 本書は、アンビックス緑が丘ニュータウン開発事業に伴う平成8年度発掘調査の概要報告である。
2. 本調査区は、栃木県河内郡河内町大字下田原に所在する。
3. 調査は、河内町教育委員会が日本国土開発株式会社の委託を受け、河内町宅地造成事業遺跡調査団が実施した。
4. 本書の内容は、平成8年10月14日から平成9年2月7日までの調査成果にもとづいている。
5. 本書の編集・執筆は、河内町宅地造成事業遺跡調査団が行った。
6. 発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や諸機関よりご指導・ご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

穴澤義功、市橋一郎、上野修一、鍋木理広、國井弘紀、茂木孝行、渡辺邦夫

文化庁、栃木県教育委員会、財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター、國學院大學栃木短期大學、リメックス株式会社、株式会社シン技術コンサル、古環境研究所、日本国土開発株式会社

## 目 次

序文 / 例言 / 目次	1
調査に至る経緯 / 位置図	2
第1地区	3, 4
第2地区	5, 6
第3地区	7, 8
総括	9
組織	10

## 調査に至る経緯

河内町の北西部には宇都宮丘陵と呼ばれる丘陵地帯がほぼ南北に連なる。とくに下田原地内には、大志白遺跡や畑ヶ入A遺跡などの周知の遺跡がこの丘陵の一角に所在する。

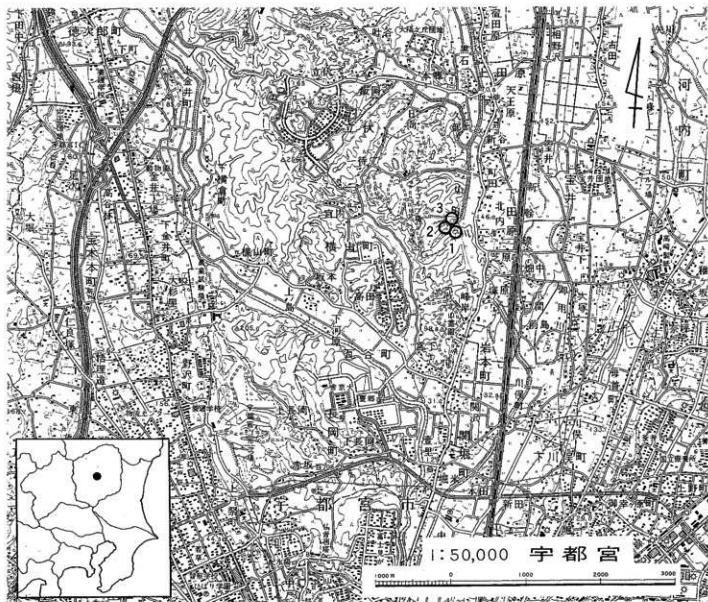
平成4年2月、これらの遺跡を含む丘陵一帯に日本国土開発株式会社によるアンビックス緑が丘ニュータウン開発計画が予定され、土地利用に関する事前協議書が河内町経由で栃木県に提出された。これを踏まえて町教育委員会では、同年12月に開発予定地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、開発予定地内（東ゾーン）には周知の遺跡を含む8か所の遺跡が存在することが明らかになった。

平成5年1月、県教育委員会より開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、事前協議が必要であるとの通

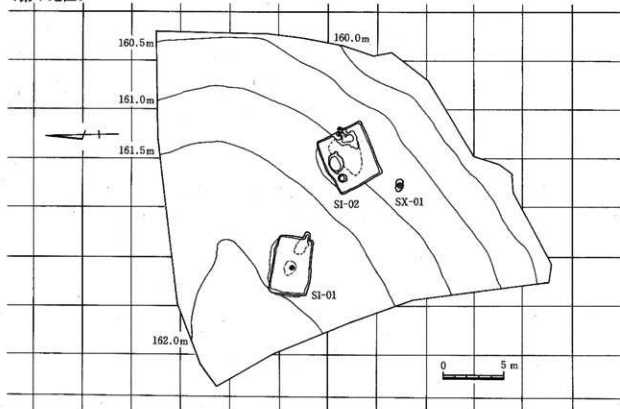
知があった。平成6年5月になって、日本国土開発株式会社より変更事業計画書が提出され、同年7月には県教育委員会より再度開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて事前協議が必要であるとの通知があった。9月には県教育委員会より、開発に先立ち周知の遺跡等の発掘調査を行うという合意のもとに最終調整を終了した旨の通知があった。これを受けて町教育委員会では、平成7年4月から日本国土開発株式会社と発掘調査に関する具体的な協議を開始し、同年7月に町教育委員会の内部に、河内町宅地造成事業遺跡調査団を設置した。

平成8年3月～5月に周知の遺跡等の試掘調査を行い、開発予定地内に遺跡群の存在が明らかになったので、同年10月から大志白遺跡群の本調査を開始した。

(河内町教育委員会)



<第1地区>



第1図 第1地区全体図

第1地区は調査区の南端に位置し、東は山田川の沖積低地、西は切通し、南北を開析谷によって区切られた尾根上にある。平地との比高は20m程である。

第1地区からは2軒の住居跡 (SI-01, SI-02) と焼土跡1か所 (SX-01) が確認検出された (第1図)。



写真1 SI-01

SI-01は長軸長さ約4.8m、短軸長さ約3.2mで東南端に竈を有し、中央に柱穴が検出された。床面の硬化度は少なく、壁面は明瞭ではない。埋没土が当時表面を覆っていたルームである為と考えられる。出土した遺物の量は比較的少なく、土師器の破片と埋没の過程で混入したと考えられる縄文土器片や礫等である。年代は土師器(甕・杯)より9世紀後葉から10世紀代と考えられる。



写真2 SI-02

SI-02は長軸長さ約4.7m、短軸長さ約4.0mで、東壁に竈を配し、その煙道部には底を抜いた土師器(甕)が用いられていた。屋内に2基の土坑を有するが柱穴は検出されなかった。床面はやや硬化し、広範囲に焼土の分布が確認された。出土遺物は土師器片、砥石、鉄鎌と縄文土器片、剃片、礫等であった。年代は出土した遺物より9世紀後葉から10世紀代と考えられる。

SX-01は長軸長さ約1.0m、短軸長さ約0.6mで中央に焼土のブロックと長軸方向に二個の礫を配している。年代は不明である。その他多数の縄文式土器片(田戸下層式・黒浜式・諸磯式が主なもの)や剃片・礫が出土したが遺溝は検出されなかった。



写真3 土層堆積状況

本調査に先立ち行われた試掘調査によって、表土から基盤岩までの層序をI層からXX層まで区分した。丘陵によって多少の差異があるものの、年代対比の決め手となるパミスが検出されている。凡そは栃木県中部の丘陵と共通すると考えられる。

旧石器調査区ではIV層からX層（鹿沼軽石層）までの深さは1.2mから1.8mである。IV層は茶褐色ローム層で橙色パミス（片岡スコリア-Nt-Kt）を少量含む。V層は褐色ローム層で橙色パミス（片岡スコリア-Nt-Kt）を多量に含む。VI層は未発泡の灰色スコリア（小川スコリア-Nt-Og）で、丘陵頂部ではブロック状に点在し、同層部では成層を為す。VII層は明褐色のローム層でやや硬質感がある。VIII層は暗褐色ローム層で第1地区ではVIIIa層（黒系の暗褐色）とVIIIb層（茶系の暗褐色で軟質）に細分した。IX層は褐色のローム層で調査区ではブロック状に存在する。X層は黄色のパミス（鹿沼軽石-Ag-KP）層である。上位の砂質部（Xa層）と下位のパミス部（Xb層）に細分した。



写真4 石器出土状況



写真5 出土石器

出土状況については粗密の差はあるものの、凡そ3つのブロックを形成している。写真4はその1か所である。出土層位についても上下差を有するがVIII層（暗褐色土）中と考えられる。

出土遺物（写真5）については整理作業以前の為、詳細に言及することは出来ないが黒曜石製のナイフ形石器が1点出土している。以外は石核・剥片・破片が主体である。

石器石材で最も多いのは安山岩で、遺物の主体を占める。器種は石核・剥片・破片である。産地の候補としては南2Kmを流れる田川があげられる。次に灰白色の凝灰質頁岩が多いが剥片のみで安山岩と同様にツールとしての出土はない。産地は不明である。ナイフに用いられた黒曜石は茶褐色の縞模様が入るのみで、気泡の極めて少ない良質な石材である。産地同定についてはまだ行っていない。しかし高原山産でないことは確実で、それ以外に求めざるを得ない。（川田 均）

## <第2地区>

第2地区は、東西に伸びる細い尾根の先端部に位置する。調査区内からは、鍛冶工房跡1軒・土坑3基・その他の遺構2か所が検出された。鍛冶工房跡は、丘陵東端の緩やかな斜面中央に位置し、沖積面からの比高は約10mである。平面形は円形に近いが凹凸のみられる形状であり、その規模は東西約3m、南北約3.3mである。

鍛冶炉は床面のほぼ中央にあり、その直径は約50～60cm程度である。工房内からは、羽口・鉄滓・鉄鋸片・鉄鏝・釘・鉄器未製品・クサビ・砥石・灰釉陶器片・鉄床石・鍛造刺片などが出土した。

遺物は、鉄滓が多く出土したのに対し、土器類は少量であった。なお、工房内及び工房周辺では床面等の土を

25cm方眼で取り上げ、工房の東斜面では土坑確認面の土を1m方眼で採取し分析に備えた。

鍛冶工房跡の東方斜面からは、鉄滓・鉄床石破片・砥石・土師器片(甕・坏)などが出土している。これらは、東西約10m、南北約7mほどの範囲に散らばっていた。工房跡の東方約5mのところからは、楕円形に近い土坑1基が確認された。

土坑の規模は、長径約1.1m、短径約0.6mで浅い皿状の凹みとなっている。土坑内からは、鉄滓・土師器片などが出土しており、鍛冶工房跡と同時期に使用されていた可能性がある。

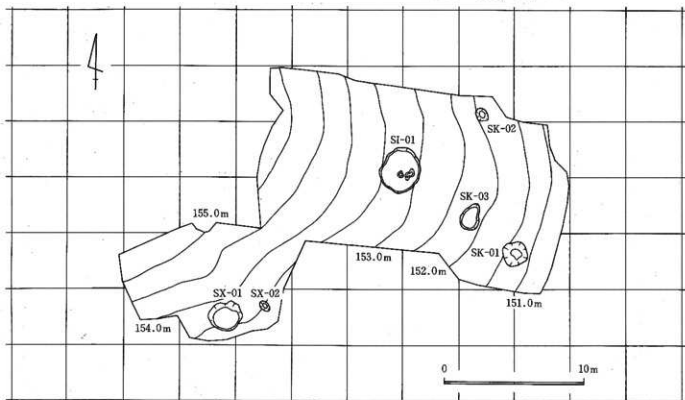
鍛冶工房跡の操業年代は、斜面から鉄滓とともに出土した土師器の年代観から、10世紀代と考えられる。



写真6 第2地区風景



写真7 鍛冶工房跡と土坑



第2図 第2地区全体図

また、第2地区の丘陵中位の尾根上には、塚が2基確認された。これら2基の塚（1号塚・2号塚）は、東西に隣接して築かれており、旧表土層を固めた後に盛り土が行なわれている。

1号塚では、塚基底面を構成する黒色の旧表土層の上にロームブロックを多く含む褐色土を突き固めて中央部を硬く築いている。2号塚においても、盛り土の中位にやや硬く締まった褐色のローム質土が認められた。

1号塚の規模は、直径2.8m、高さ約60cm。2号塚は、直径約2.4m、高さ約30cmである。土層断面の観察結果から、2基の塚は同時に築かれた可能性がある。なお、塚からの出土遺物はない。

第2地区の1号塚・2号塚以外に、丘陵の各所に塚が造営されている。塚の立地は、丘陵頂上や丘陵先端部にやや大きな塚が単独で構築されている場合、丘陵尾根部や南斜面に2基から3基の単位で築かれている例、また斜面に7基の塚が並んでいる場合などがある。なお、地元には、村ごとに「庚申塚」を造り塚に木を植えたという伝承が伝えられている。（上野川 勝）



写真10 鍛冶工房跡調査風景



写真11 遺物出土状況



写真8 出土鉄鏃



写真12 出土鉄製品



写真9 出土羽口



写真13 1号塚、2号塚

<第3地区>



写真14 第3地区全景

第3地区は、東西に伸びる丘陵の縁辺に位置し、沖積低地に臨む南緩斜面に立地している。

本地区では試掘調査時に中・近世の土坑や古銭が検出されている。

本調査において確認された遺構は、袋状の土坑1基、9世紀後葉～10世紀代の土坑1基、中・近世の土坑27基、小型犬を埋葬した穴1か所、中型獣の巣1か所、不明土



写真15 中・近世の土坑



写真16 袋状の土坑



写真17 出土古銭

坑9基、風倒木痕1か所、畝23条、水場遺構である。

袋状の土坑は、掘り込み面が一部崩落した状況で検出されたが、遺物は出土しなかった。

9世紀後葉～10世紀代の土坑は円形を呈し、覆土から内黒土器がほぼ完形で出土した。

中・近世の土坑は、方形のものと円形のものがある。方形のものは比較的浅い掘り込みをもつが、円形のはそれよりも深い掘り込みを持っている。遺物は、遺構内では検出されていないが、遺構外において古銭が検出された。この古銭は、試掘調査時のものと合わせると4枚出土している。その中の1点は、永樂通宝と判読できる古銭で、他の3枚は腐食が激しく、現時点では種類は確認できていない。

畑の畝跡は、地元の人々の話によると、つい最近までサツマイモやサトイモを作っていたり、桑畑にしていたそうであるが、いつ頃から畑として利用していたかは不明である。





写真18 水場遺構



写真19 出土土師器

中型獣の巣穴は、黒色土の厚く堆積した場所で発見され、巣穴から獣骨が見つかった。おそらくは巣の中で絶命したものと思われる。

本地区において特に注目すべき遺構は、谷頭で検出された水場遺構である。試掘調査時においては確認されな



写真21 水場遺構出土木材

かったが、本調査において畑の畝跡の検出に伴い、小さな谷が入っているのが確認された。その後、畝の調査終了を待って再確認したところ、黒色土が厚く堆積していた。谷地形のコンタ図を作成する目的で掘削したところ、2か所の湧水点を確認した。この湧水点は、上下二段に別れており、下段の部分から大きめの礫が数点出土した。さらに南斜面に向かって黒色土を掘り下げたところ、扇状に広がる埋没谷であることが確認された。水場遺構は、この時に検出したものである。この遺構は、2か所の湧水点を利用し、四角の「溜まり」に流れ込むように水を引いている。木や石を組んで簡単な堤を築いている。堤の中から杭や面取りした木材、土師器・須恵器などが出土している。

遺物としては、羽口・鉄滓などの鍛冶関連の遺物が水場遺構から出土している。

(古庄 浩明・戸田 富二夫)



写真20 古代の土坑

## 総 括

大志白遺跡群は河内町下田原地内に所在する。宇都宮丘陵の北部に位置し、山田川の右岸で標高146m～200mの丘陵上に立地する。

平成8年3月11日～5月2日まで周知の遺跡等の試掘調査が行なわれたが、その結果丘陵頂部の平坦面や尾根上の緩斜面に旧石器時代から縄文時代早期・前期・中期、古代～近世に互る複合遺跡の存在が確認された。よってこれらの遺跡を大志白遺跡群と総称する。

遺跡の乗る宇都宮丘陵は栃木県では最も古い地形面のひとつに属し、したがってこの丘陵には更新世の火山灰が厚く堆積している。古鬼怒川の開折による深い谷が支谷を形成し、東南方向に緩やかに延びる尾根が連なる。このような支谷に挟まれた尾根の最高位の平坦面や緩斜面に遺跡が立地するのである。

ところで、この調査は民間宅地開発に伴う事前調査であるため、私たちは河内町の貴重な遺跡を後世に記録保存というかたちで残す立場から種々の制約のなかで最大限の成果をあげることがを念頭に置き、地域研究に裨益することのできる情報源の収集に努めている。

とくに丘陵上に立地する遺跡群の調査は県内でも頻例がほとんどなく、その実態は不明な点が少なくない。このことを鑑みて、本調査では丘陵上に占地する遺跡のあり方を把握するため、遺跡の種類、時代、遺構・遺物の遺存状態、土層の堆積状況などの観察を行ないながら、旧石器から縄文時代、古代～近世に互る遺跡群の実態解明を目的とした考古学的調査を指向している。究極的には宇都宮丘陵北部における遺跡群の様相を明らかにして、埋もれた地域の歴史を再構成しようとするものである。

大志白遺跡群は45haという調査対象面積の中に点在することから、本調査では調査区を10区に分けている。今回の報告は平成8年度に実施された第1・第2・第3地区の概要をまとめたものである。調査面積は遺構調査がおよそ1800㎡、旧石器調査がおよそ230㎡である。なおこの地区は調整池および幹線道路の取り付け部分にあたる。各地区は山田川に面する尾根の先端部にあたり、古代～近世の遺構の存在が確認されていた地区である。

第1地区は頂部にわずかの平坦面を残す丘陵の先端部にあたり、9世紀後葉～10世紀代の住居跡が2軒検出された。2軒とも竈をもつ堅穴住居であり、ローム層を掘り込み、床面は小川スコリアの上面にまで達していた。この平坦面には旧石器時代の遺跡が存在すると予想され

たので、住居跡の調査終了後第IV層以下を掘り下げたところ第VIII層（暗色帯）中から黒曜石製のナイフ形石器を含む石器群が検出された。小規模なブロックであり遺物量も少なかったが、この発見で丘陵先端部の平坦面から緩斜面の変換点に後期旧石器時代の遺跡が立地することを確認することができたのは大きな収穫であった。

なおこの地区は鹿沼軽石層の下を掘り下げ、中期旧石器時代遺跡の有無を検討した。基盤直上まで掘り下げたがローム層の堆積が薄く、1m余りで基盤岩が露出し石器の発見には至らなかった。

第2地区は試掘調査で鍛冶工房跡が1軒確認された地区である。本調査では工房跡の精査と関連遺構の検出に努めた。その結果丘陵先端部の緩斜面に土坑3基、その他の遺構が2か所新たに検出された。鍛冶工房跡の東方5mのところで検出された土坑は工房跡と同時期に使用された可能性がある。また鍛冶工房跡の換業年代は10世紀代と考えられる。

なお第2地区の丘陵中位の尾根上には近世の塚が2基確認された。このような塚は丘陵上の各所に造られているが、庚申塚との関連が予想されるところである。

第3地区は「周知の遺跡」大志白遺跡で、沖積低地に臨む丘陵先端部の南緩斜面に位置する。この地区は表土層に覆われて、中・近世の遺構がよく保存されていた。袋状の土坑1基、9世紀後葉～10世紀代の土坑1基、中・近世の土坑27基が検出されている。中・近世の土坑は、おそらく墓坑であろう。9世紀後葉～10世紀代の土坑からは完形の内黒土器が出土している。

なお低平な緩斜面には浅い谷が台地のほぼ中央に入り込んでいたので、表土を掘削し谷地形を記録した。このとき新たに湧水点を利用した水場遺構を検出した。この中から杭や面取りされた木材、土師器、須恵器などが出土している。また水場遺構からは羽口、鉄滓などの鍛冶関連の遺物が出土している。注目すべき遺構といえるだろう。

私たちは、約4か月にわたる第1地区～第3地区の発掘によって、山田川に面する丘陵地の先端部に後期旧石器時代から古代、中・近世の遺跡が占地する事実をつきとめることができた。この丘陵は頂部の平坦面で黒色土の保存が悪く、しかも覆土がロームであるために遺構の確認に難しさが伴うが、今後調査区を掘り進めていくなかで、大志白遺跡群の具体的な様相が、より鮮明になっていくものと期待される。

（戸正勝）

### 河内町宅地造成事業遺跡調査団組織名簿

團 長	和田 實	河内町教育委員会教育長
参 与	増潤 昭	河内町企画課課長
	森 清文	河内町都市計画課課長
	五月女正典	河内町産業経済課課長
	小森 徹	河内町農業委員会事務局長
	安島 敏光	河内町教育委員会事務局社会教育課課長
総括主任	戸田 正勝	國學院大學栃木短期大學学芸員・講師
調 査 員	川田 均	日本考古学協会会員
	上野川 勝	日本考古学協会会員
	古庄 浩明	國學院大學栃木高等学校講師
	戸田富二夫	東 洋 大 学 卒
庶 務	河内町教育委員会事務局社会教育課	
	齋藤 清美	社会教育課課長補佐
	齋藤 幸夫	社会教育課副主幹兼文化振興係長
	石井 良枝	社会教育課文化振興係
		(平成9年3月末現在)

事 業 主	日本国土開発株式会社
協力業者	リメックス株式会社
所 長	須田 修 副所長 石川恭行 監督 干川英雄 技師 西田正寿、辻弘和 岩本一幸、鈴木憲夫 事務 多田出明美、高木省子
作 業 員	青木兵造、宇賀神誠、小川英幸、齋藤昭男、鈴木久夫、田中勇三、戸村義男 嶋川弘、藤江庄平、半田実、星光栄、森田元三、吉沢正夫、村田庄一郎 磯村秀子、磯村真理、猪瀬ヒサ子、大谷栄子、岡本里子、齋藤サイ、鈴木夢子 田中ミヤ、綱川マツノ、中村清子、福田弘美、山本京子、藍原千代子 菊池美代子、桑原キヨコ、亀和田文枝、稲葉治
重 機	(株)小宅建材 金沢重美、猪瀬賢一、君島光司





---

大志白遺跡群発掘調査概報 I

1997年3月31日

編集 河内町宅地造成事業遺跡調査団  
発行 河内町教育委員会

〒329-11

栃木県河内郡河内町中岡本 3225

TEL028 (673) 0800

印刷 株式会社・テ・オ・印刷

---